

「金持ちと貧しいラザロ」（ルカによる福音書一六章一四～三一節）

## 1 「ある金持ち」とはだれか

大きな物語によるイエスの教えが、このところつづいています。一五章の放蕩息子の譬え、一六章に入って、先週取り上げた、不正な管理人の譬え、そして今日の「金持ちとラザロ」などです。

じつは、この一五章、一六章に収められているこうした譬えには、共通した、同じような言い方が見られます。

同じような言い方というのは、譬えの語り出しのところでは、例えば、一連の譬えの最初の「見失った羊の譬え」、ここでは、「百匹の羊を持っている人」がいたとはじまっています（一五・四）。

この「〴〵の人がいた」という言い方です。「放蕩息子の譬え」では「息子が二人いた人」がいた、とはじまっています。それから「不正な管理人の譬え」では、「一人の管理人を持ったある金持ちの人がいた」（一六・一）。そして今日の箇所、「金持ちのある人がいた」となっています。今日のイエスの長い話も、この「ある金持ち」が中心人物ということになります。

それならこの「ある金持ち」とはだれのことでしょうか、イエスはだれのことをこの「ある金持ち」に例えているのでしょうか。改めて今日の箇所の最初のところを見なければなりません。

金に執着するファリサイ派の人々が、この一部始終を聞いて、イエスをあざ笑った。そこで、イエスは言われた。・・・（一四節）。

この「そこで、イエスは言われた」というのが「金持ちとラザロ」の話までつづいているのです。ですから今日の箇所も語られたのは、ファリサイ派の人々に対してです。今日の譬えに出てくる「ある金持ち」とは、「金に執着するファリサイ派の人々」にほかなりません。

「この一部始終を聞いて」というのは、すぐ前の、不正な管理人の譬えと、それにつづくイエスの言葉のことです。不正な管理人の譬えそのものは、イエスの弟子たちに語られたものでした（一六・一）が、終わりのところに「神と富とに仕えることはできない」（一三節）とあって、これが、ファリサイ派の反応を誘発することになったかも知れません。

つまり、簡単に言えば、彼らは、神と富とに兼ね仕えることはできる、できるだけか、神を熱心に信じ、仕えていることの証拠が、この世でお金持ちになることだと考えていたのです。

信仰がこの世での富や繁栄をもたらすことは、ありません。ないと言うことはできません。大いにあります。旧約聖書は、ご承知のように、この世における富や繁栄を神の祝福と見えています。

しかし、反対に、富んでいるから、繁栄しているから信仰があるということではでき

ません。むしろ、そうした富、お金、繁栄や人間的な幸福によって、神信仰をなくしてしまふ、富やお金が第一になつてしまふ、神になつてしまふ、そして自分はそれに奉仕し、隷属する、そういうことが少なくないのです。その意味で、つねに神か富かという決断の前に立たされている、神第一であるように。それこそイエスが弟子たちに求めたことでした。しかし、フアリサイ派の人々、そして律法学者たちは、そうしたイエスをあざ笑つたのです。

## 2 兄弟たちの存在

さて「金持ちとラザロ」の話です。主役は二人、ある金持ち（名前はなし）とラザロです。話はそれほど込み入ってはいませんが、それでも二つないし三つに分けて考えたほうが分かりやすいと思います。

二つに分けるとすれば、前半は一九〜二二節です。金持ちとラザロの生前の生活の様子が語られています。後半は、二三節以下です。二人が死んで、ラザロはアブラハムのもとに、金持ちは陰府にいます。「陰府」とは、旧約では、死んだ人の行く地下の陰惨な場所、最後の審判の、いわば待合室のようなところなのです。

さて二つではなく、三つに分けるとすれば、いま言った二三節からの後半を、さらに二つに分けることができます。二三節以下全体は、金持ちとアブラハムとの対話ですが、これを二つに分けて、二六節までが、自分のところにラザロを送ってほしいという陰府にいる金持ちの嘆願です。二七節以下は、それが不可能と知らされた金持ちが、今度はまだ生きている、地上の生活を送っている五人の「兄弟」のところに、ラザロを遣わしてほしい、そうすれば悔い改めるかも知れないからという、これも嘆願です。しかし二つの願ひとも退けられます。しかし最後のところ、彼ら兄弟たちの救ひも、可能性が全然なくはないことが暗示されて終わっています。

今回、改めて読んで、私が注目したのは、二七節以下、間接的に登場する人物、金持ちの兄弟たちです。

陰府で苦しんでいる金持ち、彼自身はそこから助け出してくれとはアブラハムに言っていない。彼は、陰府の苦しみに遭うほかに、認めて、ただラザロによって、ほんの少しの水で、自分の舌を濡らしてくれるように望んでいるだけです（二四節）。

しかしそれもできないと言われて、彼は自分の救ひは断念し、自分の家族のことを嘆願しはじめます。

金持ちは言った。「父よ、ではお願いです。わたしの父親の家にラザロを遣わしてください。わたしには兄弟が五人います。あの者たちまでこんな苦しい場所に來ることのないように、よく言い聞かせてください」。（二七〜二八節）。

この金持ちが、嘆願の内容を、こうして簡単に変えたことを読んで、彼はやはり救われないのかな、と思ひながら、いるところです。というのも、彼の脳裏に浮かんだのは、結局兄弟たちであり、家族であり、仲間でした。これも、なるほど、人と思ひやる心でしょうけれど、まさにこの金持ちと同じような生活をしてきた人たちに對す

る関心しか表明していないのです。彼の問題がそこに表れています。これはもう一度後で触れることがあるかも知れません。

地上の兄弟たちのところにラザロを派遣してほしいという願いも、アブラハムは拒否して、こう言います。

しかしアブラハムは言った。「お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい」。金持ちは言った。「いいえ、父アブラハムよ、もし、死んだ者の中からだれかが兄弟のところに行ってやれば、悔い改めるでしょう」。アブラハムは言った。「もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう」(二九〜三一節)。

「モーセと預言者」というのは、要するに、聖書です。この時代はまだ聖書という言葉はありません。「律法と預言者」、または「モーセと預言者」、これで聖書、すなわち旧約聖書を表しました。

しかし、聖書に聞けばよいというアブラハムの言葉を金持ちは受け入れず、「死人の中から」、この世に、だれかをリターンさせてほしいとお願いします、アブラハムはこれをきっぱり拒否しています。

このやりとりに金持ちの特権意識のようなものが出ています。自分は、兄弟たちも含めて特別な存在だと思っています。ここに彼の問題があるのです。

裏を返せば、この世にあって、彼ら兄弟たちは、聖書に聞いていない、神の言葉に聞いていない、そこに表された御心に従おうとしていないということです。神は聖書によつてご自分の思いを明らかにしております。律法によつても、預言者のその時々々の託宣や、神の言葉の説き明かしによつても、明らかにしています。それを超えたところに、それと別のところに、あるいはその背後に、神は御心を隠しているのではありません。聖書と別のところに神の隠れた思いがある、私どもには知られない、知らないがゆえに恐れなければならない、忖度しなければならぬ御心があるというのではないのです。御心は聖書に明らかに示されています。それに聞くこと、真剣に聞き従うことが問題なのです。

### 3 神と富に兼ねつかえることはできない

この金持ちに対するアブラハムの言葉から、なお地上にある「五人の兄弟」が、「モーセと預言者」、すなわち、聖書、神の言葉に聞き従おうとしていない様子が浮かび上がってきます。

それは、この金持ち自身が、生前、まさにそうであったということをも明らかにするものです。

モーセと預言者、すなわち、聖書に聞き従わないということは、どういうことだったのでしょうか。改めて、私どもは、生前のこの金持ち、とくにラザロとの関係を問わなければなりません。

ある金持ちがいた。いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた。犬もやって来ては、そのできものをなめた（一九〜二二節）。

ここには、ある金持ちの生前の生活ぶり、貧しいラザロのまことに惨憺たる窮状が対比されて描かれています。

着ているもの、食べ物、さらに住まい、です。食べ物のもので一つ、注釈のようなものを添えておけば、食べ物がテーブルからこぼれ落ちるイメージですが、そうではなくてパンをナプキン代わりに使って、使ったそのパンをゴミとして捨てる、そのパンのこのようなです（J・グリーン）。

金持ちとラザロの関係のことで、私ども一番驚くのは、金持ちの門の前にいつもラザロが横たわっていたのに、この金持ちは、何の関心も示していないように見えるところです。

ルカー〇章の有名な善いサマリア人の譬えを思い出します。あそこでも、道端に瀕死の状態に倒れていた人を、通りかかった祭司も神殿に勤めていたレビ人も、見つけて近寄ったけれど、通り過ぎていったのです。ここでは、金持ちは、玄関先に、体の不自由な、病気の人が、そこにいつも横たわっていたのに——死後、ラザロを認知しているの知らないわけではなかった——見もしない、何の関わりを持っていないように見えます。

ラザロという名前はエレアザルの短縮形で（神は助けたもう）という意味です。この譬えで、彼の名前は、重要な役割を果たしています。（神は助けたもう）というその名は、神はこの人を救う、神はこの人を愛しているという、はっきりして神の意思表示にほかなりません。

神はラザロを愛しておられるのです。神はラザロと共におられるのです。金持ちの玄関先に横たわっているのは「永遠のラザロ」（ボン・ヘッファー）です。この神が愛している人を、金持ちは愛しませんでした。金持ちは無視しました。関わりとうとしませんでした。彼の五人の兄弟も同じような生活をつづけていたはず。この五人の兄弟たちは、また私どもでもあるかも知れません。生前ラザロと関わりをもったのは汚れた犬でした。

今日の箇所もふくめて、富、お金の問題が、くり返し取り上げられています。一五章、一六章にかぎっても、例えば、放蕩息子の子の譬えでは、彼の「所有」しているもの、お金が彼を助けることはありませんでした。彼はただ自分の放蕩のためにだけお金を使ったのです。先週取り上げた不正な管理人の譬えでは、他人のためにお金を使った管理人が（それは不正なお金ではあったけれど）イエスによってほめられています。今日の金持ち、そしてその兄弟たちも、ただ自分のためだけにお金を使い、ぜいたくに遊び暮らしていたのです。彼とその兄弟たちは、神と富とに兼ね仕えようとして結局富だけに仕えていたフアリサイ派の人たちです。その中で彼らは、神を見失い、隣人を失い、自らの人間性も失っていました。神の言葉に聞くこと、どこまでも聞き、そして従うことが、私どもに求められていることを、今日の譬えからも、思い起こしたいと思います（八・一五、一一・二八節）。

（二〇二一・五・一五）